



SSKP つくしんぼの会報誌

つくつく通信

No. 56

つくしんぼはハンディのある子どもたちの放課後活動のスペースです

編集～「フリースペースつくしんぼ」 東京都町田市小川1511 TEL/FAX 042(796)8468

障害児のゆたかな余暇活動を考える

去る10月13日(土)に、わくわくプラザ町田講習室で、永野幸雄先生による上記講演が行われました。

その内容をまとめさせて頂きました。

すべての人が、健康で文化的な生活を

いとむ権利を持っています

すべての人というのは、老人も障害者(児)も女性もです。健康というのは病気や怪我をしていないということだけを指すのではなく……。

- ① 餓死、栄養失調にならないということ
- ② 乳幼児、子どもの死が少なくなるということ
- ③ きれいな水を確保するということ
- ④ 読み書きができるということ
- ⑤ 婦人にも参政権があるということ
- ⑥ 完全な雇用があるということ

(1979年国連の健康宣言より)



講演中の永野幸雄先生

なのです。本日の講演会の題名ですが、「余暇なんて言わないでください。余って暇な時間ではなく、生き生きとした文化的な生活を過ごす時間です。

障害を持つ人々

と旅をするという「ひまわり号」の取り組みが今年で10年を迎え、ニューヨークの国連本部へ障害者の平和宣言を手渡そうとアメリカ行きの企画が持ち上がりました。私も一緒に行くことになりました。ホームビジットという家庭訪問があり目の不自由なメリーおばさんのお宅に招かれたのですが、部屋に入ってびっくりしました。ソファのまわりにはふさふさとした観葉植物が並び、台所にはきれいな絵皿が飾られているのです。目は見えていなくても文化は心にあるのです。これが心が豊かであるということなのです。

障害を持つ子どもたちを預けて、お母さんがバレーを見に行くということがありますか。お家に絵が飾ってありますか。これも「ぜいたく」ではなく「文化」です。生活に追われ花を飾る心のゆとりがない。これでどうして文化国家と言えるでしょうか。お父さん方はよく「土日ぐっすり寝たけれども疲れが取れていない。でもしかたがない、働かなくては」と言われますが、これではさかさまですよ。我々は人間らしく生きる為に、勉強したり働くのです。

障害を持つ子達もそうです。家があって学校があって、のびのびと過ごせる第三の世界がある、それが学童保育の場です。成人の場合は青年学級なのです。これは権利なのです。恵んでもらうわけではないのです。

すべての子供には無限の発達の

可能性があります

無限というのは、天才になる可能性があるということではなく、これ以上伸びないと見限ってはいけないという意味です。発達というと、出来ないことが出来るようになるという「たて」の発達ばかりに目がいきますが、ここに気をつけなければいけない落とし穴があります。『這えば立て、立てば歩めの親心』と言いますが、これは追い立てる、人と比べるという危険性も持っています。

子どもたち一人一人に個性があります。「まだできないのか」と言う先生がいますが、先生の教え方がまずいのです。ークラ

スの生徒の数が多過ぎるのです。「おちこほれ」ではなく「おちこほし」なのです。「よこ」の発達とは持っている力を最大限に駆使するということです。はいはいをたくさんやる、今できることをたくさんやることによって、歩くという「たて」の発達につながるのです。

発達の可能性は良い働きかけ次第です。親による家庭教育、教師による学校教育そして地域の教育。地域こそ第三の世界、健康と文化の源です。

最近ようやくハンセン氏病の方が発言出来る世の中になりました。その方がおっしゃった言葉です。「足は地域に、目は日本に、心は世界に」良い言葉ですね。



今回はつくしんぼの最年少、おめめクリクリ、キュートな少女のカナちゃんです。

うちの娘カナは小学2年生。

普通級に通っているが、知的に遅れがあるので、クラスの友達に色々と助けて貰いながらなんとかやっている。

そんなある日「夏休み中に10メートルは泳げる様にして下さいね」と保護者会で先生に言われた。自慢ではないが、うちの娘は水に顔さえつけられない。まわりの親たちもザワザワする中、考えた。『先生もうちの子には、そこまで求めていないよね……。でも、最初から諦めるのもいやだし、ちょっと頑張ってみるか!』と母の一存で本人の意志とはまったく関係なく、10メートルへの挑戦は始まった。

でも水に顔をつけられない娘がいったいどうやって泳げるようになるの、と母が悶々と悩んでいる時、友人から「ゴーグルをつけると泳げるようになる」という話を聞き、このさい何でも試してみなくちゃと

ワラをもずがる思いで、ゴーグルを購入。

すると、娘はそれが結構気に入った様で、自分で洗面器に水を入れ、ブクブクやり出した。これで、あれだけいやだった、顔つけをあっさりクリア。母の意気込みが通じたのか?それともゴーグル効果か?

それから、自主的に風呂に水を入れて練習し、いつの間にか潜ったり浮かんだりが出来る様になっていた。

大分うまくなったので、いよいよプールでの練習を開始。近くの中学校のプールでやる事になったが、さすが、中学。プールの深さ150センチ、浅い所でも120センチあり、足が届かない。娘は怖がり、水中で母の体にしがみついても離れないので、困ったなと思っていると……。ここでカナの父登場。娘の体を水中でしっかり支えて安心させ、ゆっくりと顔つけから始めた。最初はいやがっていたが、何度も繰り返している

うちに慣れてきて、やがて、体を浮かせる事も出来る様に。(父は教えるのが上手だった)

こうして、水の恐怖が取れてくると、ガゼン元気になり、娘は自ら進んでプールに通い始めた。

そして8月も終り頃、とうとう娘は、溺れそうになりながらも、10メートル先に立っている母の所まで泳ぎ着き、母が抱き上げると「やった!」と歓喜の声を上げた。「この一ヶ月本当によくやったね」目を見張るほど成長した娘の姿に思わず涙腺が緩む母なのだった。

夏休みも終り、9月、水泳の記録会の日がきた。娘の帰りをソワソワしながら待つ

ていると「ただいまー」と元気な声。急いで迎えに出ると「ちょっとだけ泳いだ」と少し残念そうに記録カードを差し出した。でも、言葉のわりには元気な様子。精一杯やった結果に満足しているのだろう。「よく頑張ったね」と言っていて、記録カードを見ると、5メートルの所に金色のシールが、そしてランクは昨年の12級からずい分上がって8級になっていた。



『ささえる会』の有志より「ささえあう関係をめざして」(1)

つくしんぼの子供たちと、とりまく大人たちとがどうささえあえるのか、試行錯誤しながらある時は激論を飛ばし、ある時は励まし合いながらも行動を共に、そして、いろいろな形で社会に参加する経験をさせていただきました。ここまで来られたのも子供たち、家族、地域の方々の大きなご協力のおかげと感謝いたしております。

今後の「ささえる会」のあり方について、保護者の方々と話し合いの中で、ハンディを持つ子の家族から以下のような悩みが語られました。

- 1) 家族に障害を持つ子(者)がいるということ
- 2) 障害を持つ子が普通学級で勉強していくということ、友人関係を作っていくこと
- 3) 障害を持つ子(者)の母親が働くということ
- 4) 障害を持つ子(者)が親から離れて別の生活の時間帯を持つこと

5) 障害を持つ子(者)が地域の中で生活をしていくということ

しかし、よく考えてみると障害を持っている、持っていないに関わらず、今の社会は困難が多いと思います。子どもたちは学校での勉強や友人関係に悩んでいますし、保育園の不足や、学区に学童保育が無いなど、そして最近よくいわれる地域の重要性については、私たち全体の問題と考えます。

障害を持つ子(者)は勿論のこと、その家族や周りの人々が助けを求めた時、それに応えられるような組織作りは出来ないものか、「ささえあう会」になれないものか.....。

今後の「ささえる会」の運営は、集う機会などを設け、皆様のお知恵をお借りしたいと思っています。ご意見、ご感想などお持ちの方は、つくしんぼ内支える会までお寄せください。

(次号につづく)

